

事情があったのでしょう。例えば、魚へんの国字が多いのは、漢字に海の魚の名前を示すものが少ないからだといわれています。漢字が多く作られた殷や周、秦の時代の文明の中心は、海から遠く離れた内陸部だったので、当然の結果だといえるでしょう。

例えば、先にあげた「鰯」については、海から引き揚げるとすぐに死んでしまう「弱い魚」なので魚+弱の字を作ったといわれています。また、「鯰（なまず）」も国字ですが、中国にもナマズはおり、鮎という字で表していました。ところが、鮎という字が日本に入ったときに、（スタイルは全然違うのに）これをアユを表す字としてしまったようです。単なる間違いなのか、あるいはアユの方が食料として重要だったからか。のちにナマズを表す字が必要となり、鯰の字を作ったものと思われます。ちなみに、ナマズに当てた国字は、鯰のほかに、魚へんに「行」、「片」、「都」などいくつも作られましたが、鯰だけが生き残ったようです。

「畑」は、中国では水田も畑も「田」の字で表したのですが、日本ではこれを区別するために、草を焼いて開墾した農地を火+田で表したといわれます。「辻」は、道を表す「しんじょう」に、四つ角の形の十を加えたものです。でも中国に「四つ角」がなかったはずはありません。辻の意味の漢字に「達（キ）」というものがありますが、日本人にとって、目で見てわかる「辻」の方が受け入れやすかったということでしょう。「栃」は栃木県の名前に使われる字として2010年に常用漢字に入りましたが、古くは「栢」と書きました。十（とお）×千（ち）＝万 ということ、で、「とち」を表すのに木+万の字を作った、といわれています。ウソみたいですが本当のようです。

国字の中の出世頭は、なんと言っても「働」でしょう。この字は本家中国にも逆輸出され、特に共産党政権となってからは多用されました。なにしろ「労働」の働ですからね。もっとも、今では「動」の簡体字と同じ「动」が使われ、「働」の字は使われなくなってしまいました。

例にあげなかった国字も、辞書で調べてみると、なるほどなと思っただけの成り立ちのものが多いと思います。その理由は、国字の作り方にあります。二つ以上の意味を持ったパーツを組み合わせて複合的な意味を示す方法（これを「会意」といいます）を取ることが多いのです。先述した鰯・畑・辻や凧（こがらし：風+木）、躰（しつけ：「身」を「美」しく）など、後で見ても簡単に作字の意図が分かります。だったらこのやり方で、今までにない字をもっと作ってやろう、と考える人が出てきても不思議はありません。



江戸時代の文化文政期は、浮世絵や滑稽本などの町人文化が盛んになった時期です。「浮世風呂」や「浮世床」で有名な式亭三馬という戯作者が、左図のタイトルの滑稽本を書きました（1806年）。読み方は「おのがばかむら うそじづくし」です。この時代、「小野篁歌字尽」という、町人向けの手習いの教科書が流行していて、三馬の本はこれのパロディの形式をとっています。

小野篁（おののたかむら）は平安時代の公家・文人ですが、三馬の本では、「篁」の字はさっそく「竹+愚」という「ウソ字」に変えられています。

その他のウソ字をいくつか見てみます。「鬼+外」で「せつぶん」、頭の上に皿を書いて「かっぱ」、人を二つ重ねて「かたぐるま」。この辺はお子様向けかな。虫へんに娘は、「ゆだん」。油断すると虫がつくとか（下図左から）。



江戸時代の人が新しい漢字を作ったのだから、現代人も負けておられません。今の日本で新しい字を作るイベントと言えば、「創作漢字コンテスト」が有名です。今年が第13回で毎年夏に募集があります。主催は産経新聞社と「立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所」。後者は「漢字教育士」の認定元です。

老若男女、いろいろな人が頭を絞って、式亭三馬に負けないくらい素晴らしい漢字を作っています。著作権の関係でここには引用できませんが、是非ネットでご覧ください。

式亭三馬が作り出した字が、その後みんなが使うようになって定着した…という事例は残念ながら無いようです。しかし、現代の誰かが、今の国字と同様の素晴らしい「作品」を作り出し、それが皆に受け入れられて使われ、やがては辞書にも載るようになる、という可能性はゼロではないと思います。もしそうなったなら、なんと気分の良いことでしょう。中国古代の殷の書記になったつもりで、新しくいつまでも使われる「漢字」を作ってみませんか？

参考文献：エツコ・オバタ・ライマン著「日本人の作った漢字」（南雲堂）他

画像引用元：早稲田大学図書館ウェブサイト

*私のホームページもご覧ください！

漢字教育士ひろりの書齋

Google か YAHOO! JAPAN で検索！

この連載のバックナンバーも掲載しています。